

要旨（公表用）

浄土真宗の開祖とされる親鸞（1173-1263）については、宗門の内外を問わず、これまで様々な研究が為されてきた。そのつどの時代背景や個々の研究上の立場に従って、描き出される親鸞の姿が多様なものとなるのは当然であろう。ただし宗教者としての当人の性格を鑑みるなら、その口から語られているのは常に、一つの宗教的救済でなければならない。「弥陀五劫思惟の願を案ずるに、ひとえに親鸞一人がためなりけり」との有名な表白が示すように、そこに提示された浄土の救済思想は何より、語り手である親鸞本人に向けられた、宗教者当人の救済を語るものであって、それはこれに向き合う者が「誰」であっても変わらない。だとすれば親鸞のこの宗教的核心は、「思想そのもの」を対象的に取り出し、客観的に分析・対処しようとの要求がごく一般的なものとして浸透した現代の我々にとっては、とりわけ決定的な意味をもって来る。対象をいかに客観的かつ精確に把握するか、というごく常識的な、一般的な学的前提からは一步退いて、我々はそもそも親鸞の思想にいかにして触れることができるのか、という地点から改めて問いを提起し直す必要がある。

宗教哲学としての本論文の焦点は、まさにこの点に定められる。宗教について問うということそのものの限界とその自覚へと常に立ち返りつつ、本論考は親鸞の宗教思想について思索する。こうした態度は何も特定の学問に占有されるべきものではないが、その自覚そのものがとりわけ厳密に主題化される点に、宗教哲学が学として担う特別な意義が認められよう。そして実際、主著『教行信証』等の著述に結晶化する親鸞の普遍的な救済理念とは、まさにこの「親鸞一人がため」という救済についての際立った自覚を唯一の焦点としてのみ展開されるものである。今、親鸞に対する我々の学的関心は、救済についての研ぎ澄まされた個の自覚から一つの明確な宗教論理的表現へと展開しゆく、その内的な必然性へと向けられねばならない。

そして言うまでもなく、このように我々自身を直接うちに巻き込むことで成立する親鸞思想の思想としての普遍性は、何も現代の学的態度に対してのみ訴えられるべきことではない。その専門的で特殊な学問的な装いとは裏腹に、親鸞の宗教思想への問いはそれ自体が広く我々の日常的な生存一般への問いとして、我々の生存のあり方一切に直結しつつ、それを根本的な仕方でも問うものでなければならない（もっとも我々の生存一切とのこうした本質的な切り結びは、「念仏における一切衆生の」救済を焦点とする浄土教という教義そのものから導かれるべき事柄である）。ここから、親鸞の救済思想について思索する本論文には、全体として大きく次の三つの側面が含まれることになる。すなわち、第一に論考そのものを主導する宗教哲学的思索としての側面、第二に親鸞という思索の具体的対象に関する、教学や仏教学上の伝統的かつ専門的な解釈の側面、そして第三に必ずしも学問に限定されない、「浄土教」や「宗教」に関わる我々のごく日常的かつ一般的あり方の側面である。宗教哲学的に問いを遂行するものと

して、本論文の考察は単に第二の専門的な教義理解や文献解釈に止まるものではなく、本質的には第三の、宗教についてのより一般的で具体的な了解や問いに即しつつ、その「現代の我々にとって」を根本的に翻転させるものでなければならない。親鸞思想についての本来的な思索は我々にとって、現代の客観的な学的態度そのものについての鋭利な自己批判を嚆矢として、常に我々自身に対する根本的な問い質しとして遂行されるのである。したがって本論文は、現代の我々が親鸞思想に関して最初に抱くであろう、ごく一般的な関心に即した個別の問題提起を出発点に、それがそのつどの根本的な問い質しのもとで一つの普遍的な救済の質へと翻される、という仕方で、その思想固有の救済理念の解明を目指すことになる。各章において掘り下げられるその具体的内容については、おおよそ次のようになる。

上述の関心の所在から、導入となる第一章ではまず、親鸞が語る宗教的な「自己」のありかが確保されねばならない。自らに「親鸞一人がため」と自覚され、伸るか反るかは「面々の御はからい」だと断言されるこの宗教的決断の主体性は、いわゆる阿弥陀仏との呼応の「信」として、紛れもなくその宗教的救済の中心に位置する。ただしこの研ぎ澄まされた「信」の自己性は、我々個々人の実存的営為を延長した先に認めうるような、単なる個人的な事柄ではない。自己の問題は、己自身の根本的な無根拠性が露わにされるところからその宗教的要求が一つの歩みとなって自己を救済へと駆り立てるところから始まるが、それは自らの根源的迷妄性を自己に対して一層浮き彫りにしていくだけで、それ自体として他力の救済へと反転することのできない絶望的な歩み行きとして浮き彫りになる。これに対し、親鸞の言う阿弥陀仏との呼応の信とは、こうした自己の歩みの全体がその根幹から翻される際の宗教的転換の一点を指しており、この転換点において自己の歩み行きの一切が真実に対する方便（仮）の問題として、阿弥陀仏の救済のそのつどの具体的指し示しとして全体のうちに区別されつつ包まれることになる。そして信がこのように救済の絶対的な基点となることで、「往生」という浄土教固有の救済の形式は常に二重の意味をもって——具体的には「願生」と「得生」、および両者の関係の矛盾的な二重化として——表される。信の自己に展開される「浄土—穢土」を枠とした超越的な世界関係の具体的な解明が、以下の各章で問いを変えかたちを変え、繰り返し探究されることになる。

第二章では、「信」におけるこの宗教的転換の根本的な性格を我々の「善悪」という基準の問題として、それがとりわけ『歎異抄』固有の主題であることを確認しつつ考察する。宗教書としての『歎異抄』の類稀な魅力は、一つには我々の日常的基準を問いに付し、それがもつ基準としての価値を翻転させてしまう逆説的表現の鋭さにあると言えるが、そのような判断を可能にしているのは「阿弥陀仏の本願」という一つの超越的な基準である。『歎異抄』後半において批判される種々の異義はすべて、この超越的な基準の根本的欠如・齟齬の問題として理解しうるものであり、救済において開かれる我々の具体的な全体はこの絶対的基準と相対的基準との具体的な関係性によって組織されることになる。ただし一方で、救済についての基本的関心が「善悪」に集約され、かつ「歎異」という異義批判を主題とする本抄固有のあり方は、「仏—自己」関係を焦点としてその救済理念が展開される親鸞本人の宗教表現との決定的な違いを浮き彫りにする。『歎異抄』が内包する親鸞思想としてのこの本来的かつ非本来的な二面性は、

テキストに向き合う我々自身の「基準」への根本的な問い質しとなって、宗教的な思想研究そのものにおける基本的な態度のありかを見つめるものとなる。

第三章は、親鸞思想における宗教的行為の行為としての具体性を、「業」という言葉を手掛かりに探る試みである。法然から受け取った称名念仏の行は親鸞において、「諸仏による称揚、称讃」として、阿弥陀仏の救済作用に直接関わるより超越的な側面を強調するものとなっており、そのため我々における個々の具体的行為の、この超越的な行に対する関与が改めて問題となる。この点、親鸞において「業」という言葉は、阿弥陀仏の救済の真実性と我々自身の救いのない非真実性の双方を同時に表現するものとなっており、業が本来含意していたはずの成仏との因果関係は個々人の主題としては「信」へと譲り渡され、この信を基点に一切の具体的行為が「阿弥陀仏の浄土」を焦点とした世界的な全体として了解されることになる。念仏と他の行との相対的關係はここで、行や業に基づく我々の宗教的生存の具体的全体を表現する「仏の世界」の問題として解釈し直され、数限りなく存在する「諸仏の浄土」と、それら一切の仏によって証される唯一つの「阿弥陀仏の浄土」という、二重の世界がこれを規定する。仏の世界である「浄土」はそこにおいて仏の自利・利他が展開された固有の世界であり、そこに内包される「仏に成ること」をめぐる無数の行為・生存の重なりは、「阿弥陀仏のもとで一切の者が成仏する」という浄土教の救済のテーゼのもとに集約して受け取られるのである。親鸞特有のこの二重の救済世界の開示によって、我々の「行為」は各々固有の具体性を保ったまま、一切が阿弥陀仏の救済世界の普遍性を表現する世界的な事柄となる。

第四章は、「浄土」という浄土教の固有の救済世界を問う。ただしこれは浄土を、経典が種々具体的に描写するままの他界表象として受け取るものではない。親鸞が浄土について語るとき、これは基本的に「真一仮」、つまり真実報土と方便化土との対比構造のもとに主題化されており、しかもその対比は実体的ないし観念的な「浄土そのもの」の比較対照ではなく、常に我々自身と阿弥陀仏との「関係」を区別するものになっている。つまりこの問題は、いかなる浄土にいかにして往生するか、ではなく、救済世界としての本質、つまり救済の世界性ないし世界的な救済のあり方を問うものである。そして浄土についての我々のこの真一仮の關係性、すなわち「往生」という浄土教固有の救済の形式を区別する基準となるのが、阿弥陀仏の本願との呼応の「信」であり、中でも「欲生」（浄土に生まれたいとの意欲）という浄土に対する我々自身の直接的な關係表現が問題となる。親鸞浄土教の救済の世界性はこの「欲生」を基点とした超越的な二重性の問題として了解されるものであり、この語が指し示す「浄土」と「穢土」との關係性によって宗教的轉換の前後を矛盾的に内に包んだ一つの救済世界を開き出される。「阿弥陀仏の浄土」という浄土教固有の宗教的規定は、その内と外とを同時に包んだ、一つの普遍的救済を表現するのである。

各章での考察を経て、第五章ではそもそも親鸞の救済思想について思索し論じることそのものの根本的な矛盾が問題となる。我々に対し、親鸞の思想は一つの綿密で壮大な体系的様相をもって立ち現れるが、当の親鸞は自身にしる他者にしる、個々人を救済の絶対的な表現者、教化の主体として限定することに極めて慎重である。誰が仏・菩薩であるかについての言及のあり方も含め、浄土への往生以後の展開や、穢土に来たると言われる菩薩の問題、あるいは還相

の回向等について、親鸞の言葉が非常に曖昧で謎めいて見えるのはまさにこの「菩薩」という表象のあり方に基づくものであって、その救済思想の表現の問題はすべて菩薩を中心とした「他者との出会い」の構造に帰着する。経典を中心に諸仏諸菩薩との多様な出会いが語られるように、また親鸞において法然や聖徳太子との出会いが救済のリアリティに即して一定の仕方と言説化されているように、「信の自己」に開かれる宗教的救済の指し示し、つまり救済表現の成立そのものがこの「自－他」の出会いによって主導されることになる。浄土教の救済は宗教的「自己」を唯一の焦点とした世界的な拡がりによって展開されるが、しかしそこにおいて救済を語るの自己ではなく「仏」である。この意味で、阿弥陀仏の救済における自利も利他も、一切が例外なく「信の自己」を中心に展開されるという救済思想としての内実と、「還相」という世界全体への具体的教化の指し示しをめぐる「表現」の問題とは分けて考えられねばならない。親鸞における「還相回向」の教理表現に特徴的に表れたこの問題は、阿弥陀仏の救済が「信の自己」を焦点とした、「還相の菩薩」による指し示しによって具体化されるという仕方、その救済世界を、宗教的「自－他」関係を基点とした無限の動的展開として提示するのである。

それぞれ別個の関心から出発したはずの以上の各章は、それ固有の思索として自らを掘り下げつつ、しかしいずれも「信」を焦点とした一つの宗教的テーマ、すなわち「信が開き出す救済の世界性」へと導かれる。第一章での基礎づけが示すように、親鸞浄土教の救済を開示するのは、どこまでも「親鸞一人がため」と表現されるような宗教的自己の「信」のリアリティである。しかしそれは当の主体のうちに閉じた個人的な救済の確信ではなく、それ自体が衆生救済の仏心の具体化として、阿弥陀仏の救済を「世界」的な仕方と表現し展開するものであるから、この救済の主題はその展開の普遍性と具体性に依拠して、我々における種々の事柄の一々と宗教的に共鳴することになる。この意味で、宗教的信の「自己」論として始まる本論考が最後に救済の「他者」論として結ばれるのは、宗教思想としての一つの必然性を語るものだと言えよう。自己を焦点とした親鸞の救済を成り立たせるのは、他者を中心とした「自－他関係」（他力）であり、この関係は阿弥陀仏という「他」が「一切の他者を等しく救う」ような絶対的な他（仏）であることによって可能となる。そして親鸞－法然の關係に象徴されるような、そのつどの具体的な自他關係に自らを映し出しつつ、一つの全体として動的に展開していくこの「自－他」の救済論理は、信のもとで区別される真－仮の根本的な対立軸に即して、救われるべき者一切をその救済の流れのもとに位置づける。特定の宗教宗派の内側に立つ者も立たない者も、救いを求め呻吟する者もいまだ救済の問題そのものに直面していない者も、一切が例外なく仏の教説、すなわち自利利他へと向けられた「成仏」の理念との關係に自覚的に立っているか否かを焦点に、等しく阿弥陀仏の救済へと差し向けられていく。自己の根源的な救い難さを極点として救済の裾野を一気に外へと開き出す、「信」に具体化されるこの救済の普遍性こそ、「浄土に往生する」という形式が語るところの、浄土教固有の救済の世界性だと言えよう。

『教行信証』に代表される救済論理のこうした性格から、親鸞思想の解明は第一に、どこまでも客観的吟味に耐えうる対象的な思索としてではなく、思索する者、その思想に向き合う当事者を本質的な意味で巻き込んだものとして為されねばならない。そして第二に、このように

当の自己自身が唯一の焦点となることにおいてのみ、親鸞の思想はまさしく「浄土」の救済思想として、一切を例外なく内へと巻き込んだ普遍的な救済思想でありうる。このように、その思想表現に向き合うことが直ちに当事者において宗教的に自覚的であること、自覚的となることを要求する親鸞の思想は、問いにおける「主体」そのものの位置が見失われて久しい現代そのものに対する、一つの根本的な問題提起であると言えよう。自覚を要求する宗教思想として、この思想は現代の我々にとって一つの普遍的な宗教思想でありうるのであり、親鸞思想における現代的な課題もまた、この自覚という接点のあり方をめぐる問いとして我々の前に表れてくることになる。

(本文 6,094 字)